
咲-saki- ~福路美穂子の恋路・告白編~

laziness

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲 -saki- ～福路美穂子の恋路・告白編～

【NNコード】

N8782N

【作者名】

laziness

【あらすじ】

咲 -saki- ～二次創作

(前書き)

風越女子の福路美穂子×男オリ主のお話です。
苦手な方はブラウザバック推奨。

貴方を初めて見たのは、7年前の世界大会。

何人をも寄せ付けない圧倒的な強さで、華麗な打ち筋で、見る人全てを魅了していたその姿に、私もまた心を惹かれました。

貴方と初めて会ったのは、3年前の入学式。

居並ぶ先生方の中にあって、数多の同級生が並ぶ中で、けれど、私の瞳には貴方の姿がハッキリと映っていました。

貴方と初めて話したのは、3年前の春先。

伝統ある風越女子の麻雀部の顧問を務めていた貴方は、あの時とは違った貴祿を見に纏ついて、とても美しくて。

貴方は覚えてますか？

私と初めて会った日の事を。

貴方は覚えてますか？

私と初めて交わした言葉を。

「キャブテンの様子がおかしいんだし」

風越女子麻雀部部室にて、新入生部員である池田華菜は唐突にそんな事をのたまつた。

季節は初夏も間近な頃とあって、さては頭の中に色々湧いて来たのか……と、同じく新入部員である吉留未春は割と失礼な事を考えつつ眼前のネ^ノ少女の愚痴を右から左へと聞き流していた。

「最近妙にため息つく回数が多いし、時々上の空になつてゐるし、かと思つたら急にきょどつてゐるし……」

「…………氣のせいじゃないの?」

「氣のせいじゃないんだしつー絶対変だしつーーー」

「バン！」と机を叩き華菜が叫ぶ。

「一応今は昼休みで、此処は一年の教室で。

人こそまばらだが居ないという訳ではないので衆目もそれなりにあ

るのだが、それがまるで分かつていなか「ぐあーっ！」と叫ぶ目の前のネコ少女に胸中で嘆息を洩らす。

「つうわけで、協力して欲しいんだし」

「…………何に？」

聞きたくはないのだが、聞かざるを得ない程に鋭い目の前の少女の威圧感に、仕方なく未春が問いかける。

すると華菜は我が意を得たりとばかりにむふふと鼻をならして、

「モチ！ キャプテンの尾行だしつ……！」

ビシイツ……と音が鳴りそうなくぐりこて指を立て、清々しい程の笑顔でそう宣言した。

その姿を見て、未春は思わず頭を押されてため息を洩らす。

止めても無駄だらうとは理解していたが、それでもやつぱり止めるべきだつたか。

……まあ、そんな事をしても今現在一人で勝手に盛り上がってるこのネコ娘の暴走が止まるとは到底思えないのだが。

その翌日。

「むうう…………」

校舎の影から「onso」の姿と覗く一人。

その視線の先には、部活で使っているシーツやら何やらを洗つているキャプテンこと、福路美穂子の姿がある。

傍から見れば完全無欠にストーカーである。

「キャプテンは毎朝一番に登校して、天氣のいい日は必ず朝練前に洗濯物を済ますんだし」

「……その為に、懲り朝7時集合とか言つたの?」

「あたりまえじゃん」

何を言つてゐるんだし、とでも言つたげな視線を向ける華菜に、未春は「はあ……」と隠す事無くため息を洩らす。

と、その時

「お? 今日も福路が朝一か

(にやつ！？)

ぐわつ！と一気に表情を変えて華菜が視線を戻す。それに釣られて未春も視線を向けると、そこには此処数週間で見知つた顔があった。

「あ、金子顧問だ」

金子透。

此処風越女子の国語教諭であり、麻雀部の顧問でもある彼は、その穏やかな物腰と確かな腕前の持ち主である事から生徒に多大な人気を誇る。

滅茶苦茶に厳しいコーチであるOGの久保という人物を迎えたりと、その活動は実際に精力的で、未春自身もまだ知つてから間もないもののそれなりに信頼を寄せている人物である。

「毎朝毎朝頑張るよなあ、お前」

「こ、これでもキャプテンですか？」

「んな肩肘張らなくともいいのにな」

言つて、金子顧問が薄く微笑むと、何故か福路の頬に朱が差す。

「あれ？」と未春が疑問符を浮かべるのもつかの間

「キャプテンつー！」

物凄い勢いで華菜が疾走した。

そしてそのままの勢いで二人の間に割つて入ると、一瞬金子顧問に「ぐるる！」と威嚇する様な視線を向け、次いで福路に「にやははつ！」と満面の笑みを見せる。

何だこの状況。

朝練は基本的にフリーでの対局となる。

キヤプテンである福路は勿論、顧問である金子やコーチである久保も参戦していくので、朝から非常に空気がピリリと引き締まる。

「ロン、だな」

「に、やつ！？」

その一角、校内ランキングでも上位に食い込む 華菜を含む三人を相手に、金子顧問は実に手堅い雀風で着実に攻める。

華菜が役満狙いで切った牌から一気に繋げ、あれよあれよといつ間に跳満。

となれば当然……

「池田ア……」

やはりとこりか何と言つか、コーチがキレた。

「んな大雑把な攻めが通用する相手かどうかぐらこ区別つけたらどうだつ！？」

この久保コーチ、かなり厳しい。
それは新入生はおろか、この麻雀部に所属する部員全てに共通する見解である。

「……ま、この役狙いじゃこれ以外は切れないだろうけど

言つて、苦笑いを浮かべながら金子顧問は華菜が切った牌を摘む。

「でも、だからといって相手に読まれて逆に攻められたら折角の役満も泣きだろ？」

「はこ……」

華菜が頷くと、金子顧問は軽く華菜の頭をポンポンと叩く。

「だつたら、次にまた同じ間違いを繰り返さない様に。……ハイ！みんなも自分の対局に戻りなさい！」

柏手を打つて、金子顧問はぐるりと室内を見回す。

その言葉に従つて、止まっていた対局は次々と再開されていく。久保コーセーは何か言いたげだったが、大きく息を吐くと自分の席に戻る。

正に飴と鞭である。

そう思つていた末春は、一瞬見落としていた。

華菜の頭に金子顧問の手が置かれた時、ほんの僅かに福路の表情が変わつっていた事を。

誰かに恋する、といつ事はとても素晴らしい事だと思つ。

それは世界を鮮やかに彩ってくれるものだと、色々な本やドラマで

も言われていたから。

でも、実際はそんな事無い。

「金子先生！」

「ん？ どした福路、何か質問か？」

恋した人が、大人だつたから？

恋した人が、先生だつたから？

だから、私はこんなにも醜くなつてしまつたの？

「今度の大会に持つていいく荷物を運ぶのつて今日ですよね？」

「あ……ああー、そういうやそうちだつたな」

「運ぶの、手伝いますよ」

「はあつ！？ いや、俺一人で充分だつて！ 女の子にあんな重たいの持たせられないつて」

貴方はきっと気づいてくれなくて。

私はきっと気づいて欲しくなくて。

こんなに汚い感情がドロドロと渦巻いて、こんなに醜くなつてしまつた私なんか、貴方には相応しくなくて。

だから、私は少しでも貴方に気に入られる様な「優秀な私」を演じる。

汚い「本当」を隠して、醜い「本当」を隠して、綺麗な「嘘」を演じる。

「いいんです。私が手伝いたいから手伝ひます」

「……………ハア。好きにしろよ、もつ」

それで貴方の傍に居られるのなら、私は何時までもその「嘘」を演じ続けます。

貴方の近くに居られる事が。

貴方の傍で笑つていられる事が。

私の幸せなのだから。

「福路イー！」

今日も今日とて、コーチの怒声が響く。
しかしその声が呼んだ名前があまりにも珍しく、思わず部員達は声

のした方に視線を向けた。

見れば、肩を震わせて福路が俯いているではないか。

「テメエ、キャプテンのくせして何時刻してやがるんだアー…？」

それに気づいているのかどうなのかは不明だが、鬼もかくやひとつ形相で睨みつけ、久保は息づく暇も「えす怒鳴りつけむ。

と、

「ちよ、久保さんタンマタンマ…」

酷く慌てた様子で金子が割つて入つた。

「アア！？何だつてんだ金子オ！…」

「とりあえず落ち着いて…遅れたのにはひやんと理由があるんだからさ、ね！？」

「風越のキャプテンが遅刻なんかして許されるとでも思つてんのかア！？」

「だから理由があるつて言つてんでしょ！？」

何時になく声を張り上げる金子にギョッとしたながらも、しかし久保は憶面にも出さず続ける。

と、その時

「 じめつ……なさい……」

震えた声音でそう呟いて。
それが鼓膜を震わした時には、福路は身を翻して外へと飛び出して
いた。

「 ツー？ 福路……」

数瞬遅れて、金子も外へと向かつ。
ほんの一瞬、キツと鋭い目を久保に向けたが、それに気づいた時に
は既に金子もまた部室から姿を消していた。

「 ……チツ、何だつてんだ」

虫の居所が悪そうに、久保が吐き捨てる。
そこに至つて、漸く衆目に気づいたのだらつ。

「 テメヒ、何まつとじてやがるへ。ちつと打てーー。」

そう怒鳴り、久保もまた外へと向かう。

肩を怒らせて歩くその様を、部員たちはただ眺める事しか出来なかつた。

「福路ッ！！」

駆け寄り、どうにか見つけたその華奢な肩を鷲掴んで金子が叫ぶ。

「イヤッ！は、放して下さいッ！！」

「何でわざわざからそんなんなんだよー？ 一体何が気にいらねえんだつー？」

振り返りざまに拒絶の意を示す福路に、珍しく怒りを露わにして金子が問いかけた。

だが福路は駄々を捏ねる童子の様にいやいやと首を振り、愚図る様に涙をポロポロと零すだけで理由を話さうとしない。

「……ツ、いい加減にしろよつー」

か細い手首を掴み、一気に引き寄せて金子が怒鳴った。
瞬間、福路が彼の胸元に飛び込む様に収まる。

「ツー？だ、駄目ですツーこんな……ー」

「さつきの陰口か？」「

問うた瞬間、福路の肩がビクリと震えた。

『アンタみたいなウザい奴がうろちょろしてたら、金子先生が迷惑
だつて分かんないわけ?』

生真面目過ぎる彼女は、その性情故に何かと不興を買いやすい。
年下に慕われる半面、同期や先輩には煙たがられるのだ。

『アンタみたいな奴と、その人が釣り合つ訳ないじゃん』

だが、その理由に自分が絡んでいとはまるで考えていないかった金子は、声が聞こえた瞬間から思わず足を止めてしまった。

『分不相応なのよー少しさはあの人の迷惑も考えなさいよー』

その言葉がなければ、多分この先もずっと気がつかなかつただろう彼女の想いが、図らずも分かつてしまつたのだ。

「…………」

静かに胸の中で泣きじゃくる彼女を抱き締め、子供をあやす様にその頭を撫でる。

ブラウン色の髪の毛はさらさらとしてとても綺麗で、けれど、今の彼女は消え行つてしまつやうなぐらうことを夢くつ。

「…………あのさあ、福路」

その名前を呼ぶと、彼女の細く小さな身体がビクリと震える。

「……他の奴らの言つ事に一々振り回される必要、あるか?」

ポン、と軽く後頭部を叩いてやり、

「お前の人生はお前のモンだ。他の誰でもない、お前自身が決めて
いかなきやならない道なんだ」

言つて、その顔を無理やりこっちに向かせた。

あーあ、酷い泣きつ面。

「で……でも、わた、私……」

「ウザいとか、そんな事気にしてやる意味が俺にはそもそも理解出
来ん」

コシン、とおでこを合わせて言つと、直ぐ目の前に彼女のブラウン
の瞳が見えた。

「自分を偽つてまで、俺はお前に笑つていて欲しくなんかない。自
分に素直であつて欲しいって願うのは、教職者たる者の務めだし……」

そこで一凹凸切つて、フツと微笑んだ。

「……俺個人としても、お前には素のままでいて欲しい」

瞬間、奪つ様に唇を重ねる。

涙でちよつとだけしそうぱいそれは、最高級のスポンジの様に柔らかい。

丁寧に、けれど強引に、俺はそれを奪つ。

抱き締めていた肩の震えは、何時の間にか止まっていた。

「ツモ。 12000オール」

凛とした、実に彼女らしい声音が部室に響く。

声の主たる福路キャプテンの勇ましい姿は、見ている此方まで勇気づけられる……筈なのだが。

「ううう……」

何故か落涙して机に突つ伏す輩が一人。

「どうしたの？キャプテンは元気になつたし、万々歳じゃないの？」
「…………ぬあにが、万々歳よ」

「ガガガ……と効果音が聞こえそつなくらいに田をきりつかせて華菜
が言つ。

と、その時、

「お？ 美穂子は今日もトッピか」

なんて声が響く。

瞬間、何故か部室内にピンク色の空気が発生した幻覚を未春は垣間
見た。

「あつ、金子先生！」

……いや、幻覚ではないだらつ。

恐らく、いや確實にその空氣の発生源たる我らがキャプテンは、ま
るで外で満開となりつつある向日葵の様に鮮やかな笑みを湛えて金

子顧問を迎える。

「よし、じゃあ次は俺と……三島、橘、入って貰えるか?」

「ふふつ、今日は負けませんよ」

「おお? 言う様になつたの? あ、一いちつ~

「ひや……も、もうつ」

「ふふ、愛い奴よの?」

……何だこの状況。

「うひの部つて前から?」さなこゆるかつたつけ……

「……あ?」

呟いたそれに深堀が答える。

今現在、3年の大会の監督として出張中の久保コーチがこの時ばかりは必要に思えた。

私は、貴方の事が好きです。

誰よりも、誰よりも、貴方の事が大好きです。

どんなに言葉を使っても、きっと言い表す事が出来ないくらいに、貴方の事が好きです。

だから、私はもう「私」を偽りません。

素のままの私を、きっと好きになつて貰います。

だから

だからどうか、その時は。

私と、生涯を共に添い遂げる誓いをして貰ませんか？

(後書き)

作者は部キャプも好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782n/>

咲-saki- ~福路美穂子の恋路・告白編~

2010年11月24日09時49分発行